

自主的、実践的な態度の育成を図る学級活動の工夫 ～自己評価を生かした話し合い活動を通して～

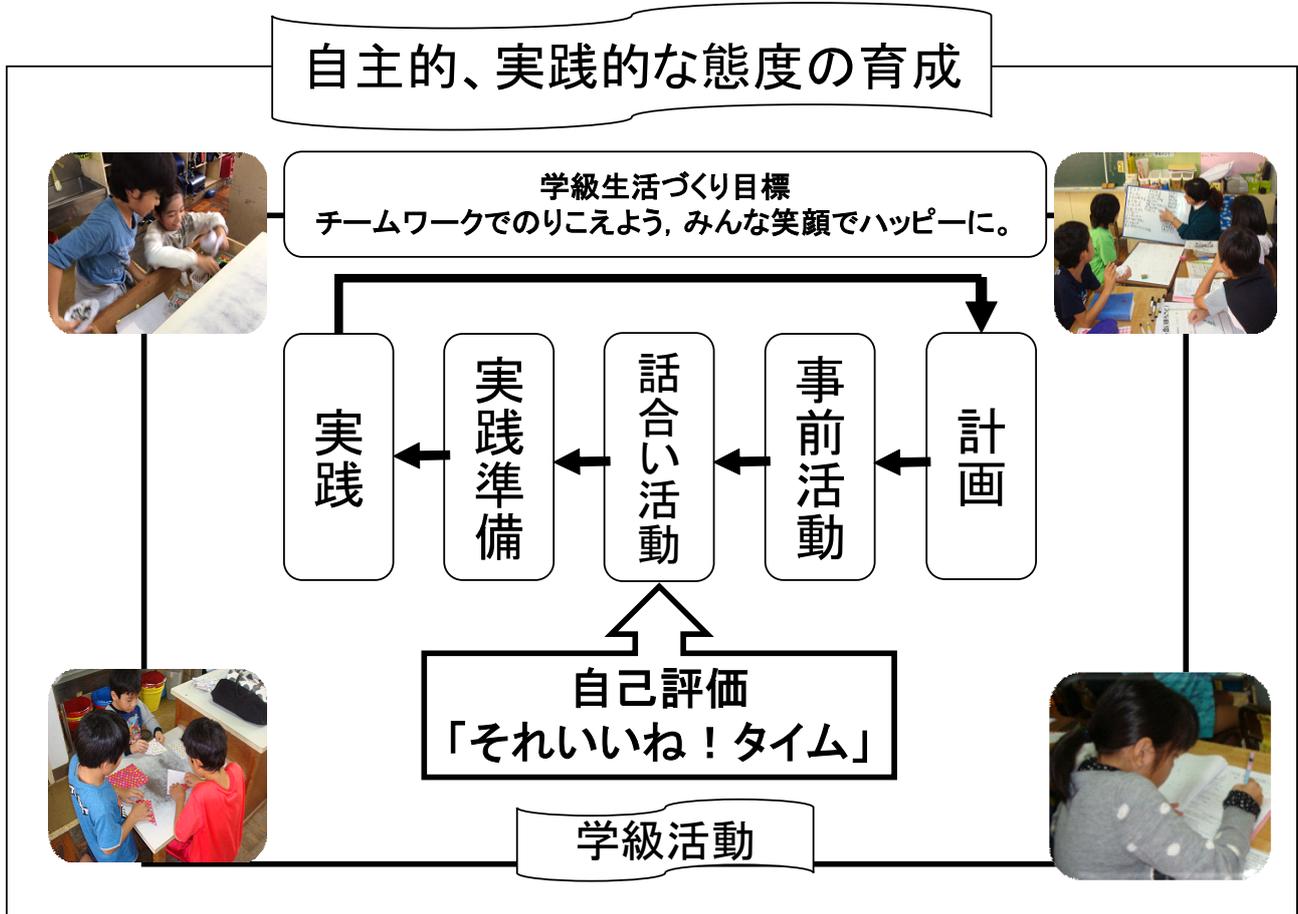
那覇市立石嶺小学校教諭 棚原 綾乃

〈研究の概要〉

小学校特別活動においては、集団の一員として学級や学校におけるよりよい生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度の育成が重要視されている。

本研究では、実践に向けての話し合い活動の「比べ合う」場で、自己評価を取り入れ、折り合いを付けて合意形成を図り、よりよい集団決定につなげる。それにより活動意欲を高めた実践活動ができるようにする。そして、学級活動全体を通して自主的、実践的な態度の育成を目指した学級活動の工夫に取り組み、実践を通して検証した。

〈研究のイメージ〉



〈研究の成果〉

- (1) 話し合い活動の「比べ合う」場において、自己評価を取り入れ児童の考えを整理・修正することで、折り合いをつけた合意形成を図り、よりよい集団決定につなぐことができた。
- (2) 話し合い活動を通して、児童一人一人が協力し自ら進んで活動に取り組む態度を育むことができた。

目次

I	テーマ設定の理由	33
II	研究目標	33
III	研究仮説	33
	1 基本仮説	
	2 作業仮説	
IV	研究構想図	34
V	研究内容と方法	34
	1 自主的、実践的な態度の育成について	
	2 話し合い活動について	
	(1) 学級生活づくり目標について	
	(2) 自己評価について	
	① 自己評価の意義	
	② 自己評価「それいいね！タイム」の工夫	
	(3) 話し合い活動で折り合うことについて	
VI	授業実践（第3学年）	36
	1 議題名「室内ゲーム大会の計画を立てよう」	
	2 議題設定の理由	
	3 本時から実践までの取り組み	
	4 本時の展開 (1)ねらい (2)授業仮説 (3)展開	
VII	結果と考察	37
	1 作業仮説の検証	
	(1) 自己評価の場における児童の変容	
	(2) 実践（集会活動）の場における児童の変容	
VIII	成果と課題	40
	1 成果	
	2 課題	
	《主な引用文献と資料》	

自主的、実践的な態度の育成を図る学級活動の工夫 ～自己評価を生かした話し合い活動を通して～

那覇市立石嶺小学校教諭 棚原 綾乃

I テーマ設定の理由

小学校学習指導要領解説特別活動編の学級活動の目標には、「集団の一員として学級や学校におけるよりよい生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育てる」と明記されている。平成27年度全国学力・学習状況調査質問紙調査のクロス分析によると「学級会などの時間に友達同士で話合っただけで学級のきまりなどを決めていく」との項目に、肯定的に回答している児童が、すべての教科で平均正答率が高い傾向があるという報告がなされている。その点において、諸問題を解決しようとする話し合い活動の担う役割は大きいと考える。

本学級では、4月当初に児童が「学級生活づくり目標」を決め、その目標を意識して学級活動や話し合い活動などに取り組んできた。これまでの話し合い活動では、決定事項に対して互いに協力して実践してきた。しかし、「集会活動に自分から進んで参加していますか」の問いには、「積極的に参加している」と答えた児童は51%で、残りの49%の中には「みんながやるからやっている」との受け身的な回答が見られた。これまでの話し合い活動で児童が意見を出し、まとめることはできたが、「自分もよく、みんなもよい」という折り合いを付けた合意形成が図れず、集団決定につなげられなかった。このようなことから、児童が折り合いを付けた合意形成を図り集団決定ができるように、自分の考えを振り返る「自己評価」の場が重要であると考えた。

自己評価は、学級活動を通して様々な場面で行われている。そこで、話し合い活動中の「比べ合う」場における自己評価に視点をあて、自分の考えを振り返る場を設定することで、児童は自分と他者との意見の共通点や相違点などを整理・修正し、折り合いを付けながら合意形成を図り、よりよい集団決定ができるのではないかと考えた。

本研究では、話し合い活動の「比べ合う」場で、折り合いを付けて合意形成を図り、よりよい集団決定ができるようにし、自己評価を取り入れ、そして意欲を高めて活動につなげられるように、自主的、実践的な態度の育成ができる学級活動の工夫を研究する。

II 研究目標

児童の自主的、実践的な態度を育てるために、話し合い活動で「比べ合う」場において、自己評価を取り入れ、集団決定を行い、自ら進んで活動する指導の在り方を研究する。

III 研究仮説

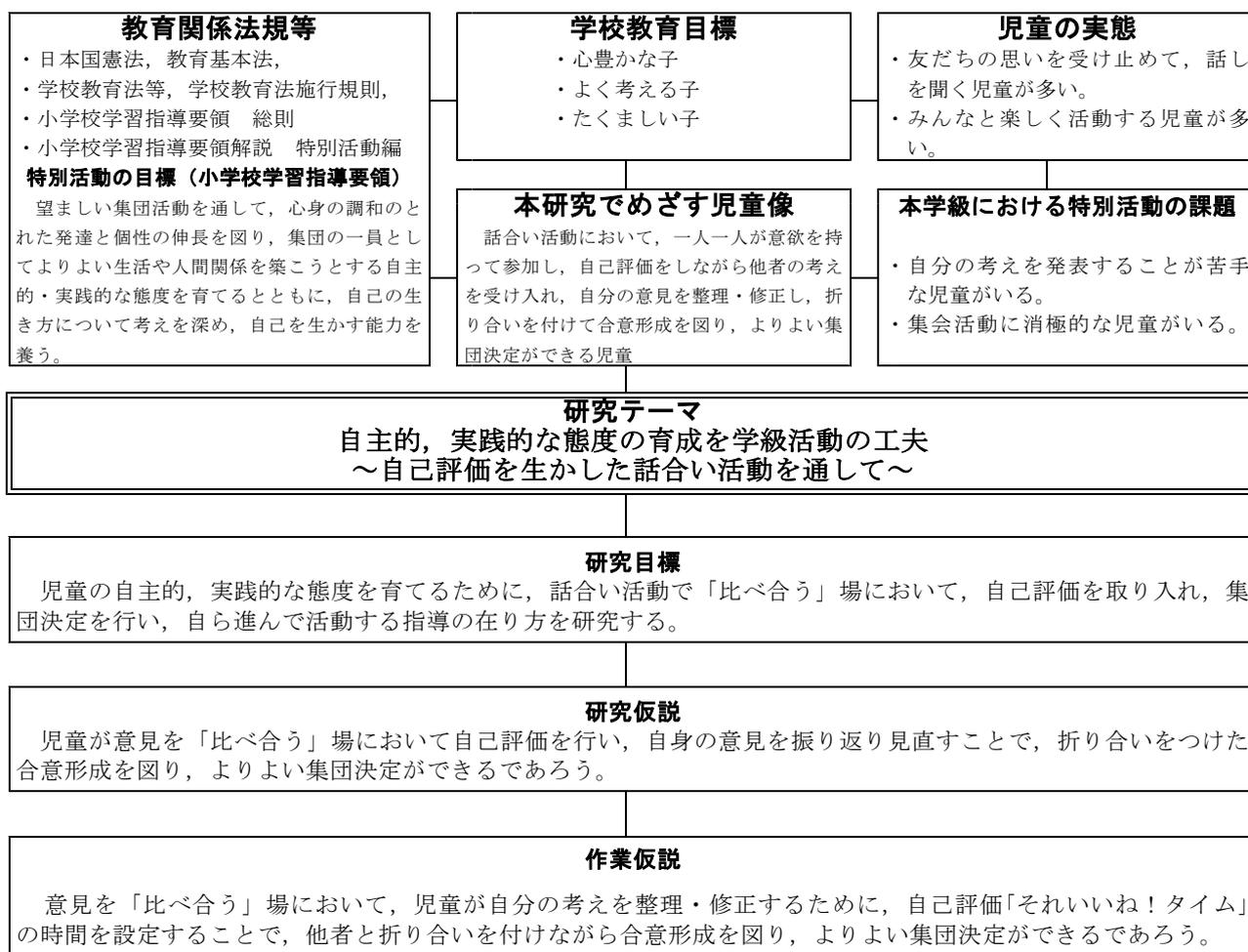
1 基本仮説

児童が意見を「比べ合う」場において自己評価を行い、自身の意見を振り返り見直すことで、折り合いをつけた合意形成を図り、よりよい集団決定ができるであろう。

2 作業仮説

意見を「比べ合う」場において、児童が自分の考えを整理・修正するために、自己評価「それいいね！タイム」の時間を設定することで、他者と折り合いを付けながら合意形成を図り、よりよい集団決定ができるであろう。

IV 研究構想図



V 研究内容と方法

1 自主的，実践的な態度の育成について

「小学校学習指導要領第6章 特別活動」の学級活動の目標では，「学級活動を通して，望ましい人間関係を形成し，集団の一員として学級や学校におけるよりよい生活づくりに参画し，諸問題を解決しようとする自主的，実践的な態度や健全な生活態度を育てる」と記されている。このことから，児童が楽しく豊かな学級生活をつくるために，自主的，実践的な態度を育成することが重視されていることがわかる。学習指導要領の内容の解説によると，自主的，実践的な態度について，「学級活動で育てたい『自主的，実践的な態度』とは，目標をもち，学級の一員としてよりよい生活を築くために役割や責任を果たし，生活や学習に関する諸問題について，自己をよりよく生かすとともに，みんなで話し合い，協力して解決したり，自己の生き方について考えを深めたりする」と述べている。このことから，互いに尊重しよさを認め合える人間関係をつくることで，集団の一員としての所属感を深め，主体的に生活や学習に取り組む態度を身に付けることができると考える。本研究では，学級生活づくり目標を意識しながら話し合い活動の中で自己評価を行い，自分の考えを整理・修正をし，折り合いをつけた合意形成を図り，よりよい集団決定につなぎ，自ら進んで活動ができるようにするための研究に取り組んでいく。

2 話し合い活動について

(1) 学級生活づくり目標について

杉田(2009)は、「望ましい集団活動を通してよりよい生活や人間関係を築く態度を形成するためには、年度当初から学級意識（「自分たちの学級」という愛着）を高める活動に取り組みさせることが重要である。」「よりよい生活づくりの第一歩としても目標づくりが欠かせない。」と述べている。また、子ども達の思いを大切に学級生活づくり目標について杉田は、「いつでも、どこでもみんなの心にある目標にするために、発展的、継続的な活動を積み上げていくことが大切」だと述べている。本学級においては、4月当初に学級生活づくり目標「チームワークでのりこえよう、みんな笑顔でハッピーに。」を立てた。

(2) 自己評価について

① 自己評価の意義

梶田(1996)は自己評価について「自己を色々な視点から吟味検討し、自己の今ある現状を判断する」と述べている。話し合い活動において自己を色々な視点から吟味し、検討するには、多様な考えに触れられるように児童相互の意見の交流場面を設定する必要があると考える。また、自分の今ある現状を判断するには、児童同士の相互交流を通して、自分の学習の状況や成果について自身の行動、言動、態度などを振り返ることが重要だと考える。

本研究では、学級活動を通して様々な場面で自己評価を取り入れ、折り合いを付けた合意形成を図り、よりよい集団決定につなげていく。そこで話し合い活動の「比べ合う」場において、他者の考えを聴きながら、自分の考えを整理・修正し、相互の考えを深めていく「自己評価」を取り入れていきたいと考える。

② 自己評価「それいいね！タイム」の工夫

話し合い活動の中に自己評価を取り入れるには、話し合い活動の全体を見通した授業設計を行う必要があると考える(図1)。これまで児童が振り返りを行うことは、様々な場面で行ってきた。

本研究では、話し合い活動の「比べ合う」場で自己評価を取り入れて意志決定をし、よりよい集団決定へつなげていきたい。そうすることで、自分なりに納得ができ、その後の実践につないでいくことができると思う。

本研究で行う話し合い活動での自己評価では、「比べ合う」場において「学級生活づくり目標やめあてからそれしていないか確認する」「友だちの考えをよく聞いて理解し、再度自分の意見を見直す」「自分の考えと出された意見は異なるが、自分の考えと折り合いを図る」ことを行う。その結果、自分の意志の決定につなげることができると考える。

本研究では、話し合い活動における「比べ合う」場での自己評価を「それいいね！タイム」とする。「比べ合う」場では、意見を出し合い、1回目の全体の意見を確認する(図2)。次に、意見に対しての質問・賛成・反対意見を述べ合う。その後、「それいいね！タイム」の時間を設け、再度めあてを確認し、友だちと自分の意見を比較・検討しながら、相互の意見の折り合いを図っていく。その上で自分の意見を整理・修正し、より自分自身が納得する意

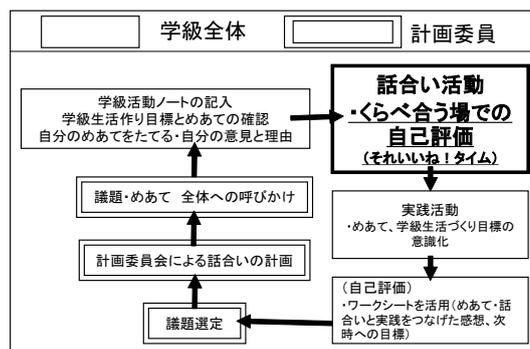


図1 自己評価を取り入れた話し合い活動全体の構想図
【琉球大学教育学部附属小学校研究紀要 第10集】

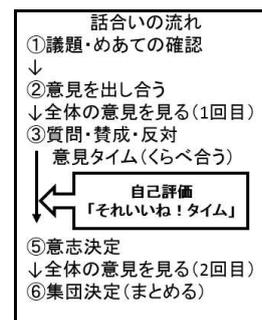


図2 自己評価を行う場面

志の決定ができる」と期待される。また、学級活動ノートに「それいいね！タイム」の欄を設け、自分の意見の整理・修正した跡が見えるように工夫を行う(図3)。そして、2回目の全体の意見の確認を行い、児童は互いの考えをより深めながら折り合いを付けた合意形成を図り、よりよい集団決定ができるようになる」と考える。

(3) 話し合い活動で折り合うことについて

折り合いを付けた合意形成を図ることのできる学級をつくるためには、学級会の質を高める必要があると考える。『楽しく豊かな学級学校生活をつくる特別活動(2014)』では、「自治的な話し合い活動である学級会が担っている役割は、相手の意見を尊重し、少数意見にも配慮しつつ、折り合いを付けながら合意形成を図っていくことができるようにする」と記されている。

また、「折り合いとは、合意点を見いだし、互いの意見を調整して納得できる考えを作り出す」とあり、「『自分もよく、みんなもよいこと』と思えることを『折り合いを付けて』話し合えるようにする」と明記されている。そこで杉田は、折り合いのステップを5つの項目に表し、折り合いをつけることよさを実感させる手順を示している(図4)。

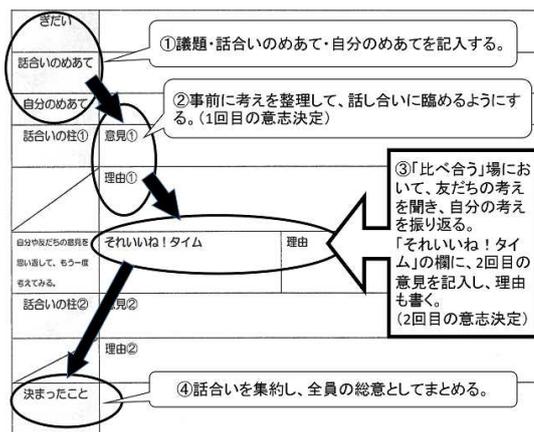


図3 学級活動ノートの工夫

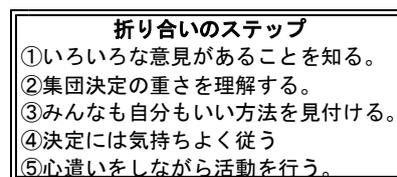


図4 折り合いのよさを実感させる手順【杉田(2009)】

VI 授業実践 (第3学年)

1 議題名 「室内ゲーム大会の計画を立てよう」

2 議題選定の理由

本議題は、議題提案カードの中から計画委員が「室内ゲーム」の議題を選定し、実践することにした。児童は、話し合い活動の流れを理解し、自分の意見を述べることはできている。しかし意見を出した後、自分の意見が決まるように何度もアピールする児童、意見を出すのみに終わる児童もいる。そのため、深まりのある話し合い活動が展開されず、自分もみんなも納得する合意形成を図ることができていないため、よりよい集団決定に至っていない。そこで、「比べ合う場」において、自分自身の考えを振り返る自己評価を取り入れ、折り合いをつけた合意形成を図り、よりよい集団決定につなげられるようにする。また、互いの意見を尊重し合い、協力して自分たちの力で学級生活をつくっていかうとする態度を高めていきたい。

3 本時から実践までの取り組み

実施月日	内容	時間	対象
12月7日(月)	議題提案カードから、議題を選定して確認する。役割分担を行う。	放課後	計画委員
12月8日(火)	提案された議題、めあてを学級全員に知らせる。学級活動ノートへ自分の考えを記入する。	放課後	計画委員 学級全員
12月9日(水)	司会や黒板記録などの確認をする。意見を短冊にまとめ、掲示の準備をする。	放課後	計画委員
12月15日(火)	話し合いの流れの最終チェックをする。	放課後	計画委員
12月17日(木)	【本時】学級活動(1)「室内ゲーム大会の計画を立てよう」	学級活動	学級全員
12月18日(金)	ゲーム大会の係の分担をする。	放課後	学級全員
12月22日(火)	(実践)「室内ゲーム大会」を行う。 「室内ゲーム大会」の振り返りをする。	学級活動 学級活動	学級全員 学級全員

4 本時の展開

(1) ねらい

めあてを意識し、友だちの意見をよく聞いて、自分の意見を振り返りながら自己評価し、全体の立場に立った集団決定ができる。

(2) 授業仮説

話し合いの「比べ合う」場において、自分の意見を見つめ直し整理することができる自己評価「それいいね！タイム」の場を設定すれば、折り合いを付け合意形成を行い、よりよい集団決定をすることができるだろう。

(3) 展開

話し合いの順序(□児童の活動)	指導上の留意点(■教師の発言・手立て ◎児童の発言 ○ノート記述)
めあて みんながえがおでハッピーになれる「室内ゲーム大会」のゲームの内容と係を決めよう。	
話し合い (1)話し合いの柱1(20分) ①意見を出し合う 室内ゲーム大会の内容を考えよう。	<p>■多くの児童に意見を出させる。 ■「もう一度、学級生活づくり目標と今日のめあてに立ち返ってみよう。本当に自分の選んだ意見がめあてに沿っているかな？」と、再度めあてを振り返らせる。 ■友だちの意見との違いを踏まえて、どう自分の意見を整理・修正すればよいのか助言し、学級活動ノートに書かせ、発表させる。</p> <p>◎私は、最初は「風船パタパタ」がいいと思いましたが、Sさんの「みんなが笑顔でハッピーになる教室宝探し」と聞いて、教室宝探しの方が笑顔でハッピーになると思ったので、意見を変えました。」(意見の修正) ◎「Aさんの「教室宝探し」の意見も良いけど、僕は「震源地はどこだ」を変えませんでした。なぜなら、震源地はどこかは、全員が参加できて笑顔になれると思ったからです。」(意見の整理) ◎私は、やはり最初の意見「震源地はどこだ」にしました。なぜなら、Tさんの意見を聞いてやはりこれが良いと思いました。(意見の整理) ◎僕はSさんの意見を聞いて変わりました。やはり「宝探し」が良いと思いました。なぜなら宝はどこにあるか予想して見つかったらみんなが喜ぶし、笑顔でハッピーになるからです。(意見の修正) ■(意見が偏っていたため)「一度、自分がこれだ！と決めた意見でみんなが遊んでいる姿を想像してみてください。」</p> <p>○児童のノート記述より ○僕はやはり「宝探し」が良いと思います。なぜなら、みんながハラハラドキドキして楽しめそうだからです。(意見の整理) ○僕は最初「風船パタパタ」でしたが、Sさんの宝探しが良いと思いました。それに、少しつけ足したら面白い宝探しになりそうだからです。(意見の修正)</p> <p>■「自分もよく、みんなもよいこと、全員が楽しめる活動の視点で、折り合いを付けて合意形成を図った後、よりよい集団決定ができるように促す。 <u>一番ネームプレートが多い「教室宝探し」に決定。</u> ■決まらなかった意見は、係活動や次回の話し合いでできないか促す。</p>
□風船パタパタ、教室宝探し、ダンボールボールなど ②比べ合う □全体の意見を見るためにネームプレートを貼る。その後、質問、賛成反対意見を発表。 ③「それいいね！タイム」 (自己評価・意志の決定をする。) □自己評価を行い、自分の意見を見直し、他者と自分の意見の違いを理解し、自分の意見を整理・修正する。 □自己評価後、自分が納得する意見にネームプレートを動かす。 2回目の全体の意見を見る。 ③まとめる (集団決定) □教室宝探し(21名)、 ペットボトルボーリング (2名) ダンボールボール(2名)	



VII 結果と考察

1 授業仮説の検証

「比べ合う」場において、児童が自分の考えを整理・修正するために、自己評価「それいいね！タイム」の時間を設定することで、他者と折り合いを付けながら合意形成を図り、よりよい集団決定ができるであろう。

(1) 自己評価の場における児童の変容

本学級の児童は、これまでに13回の話し合い活動に取り組んできた。児童は活動を通して、めあてを意識し、集団決定ができるようになってきた。そして、児童の話し合い活動の振り返りの記述の中には、「めあてを考えて全員が活動に参加できるものに決まって良かった。」「め

あてからそれないように話し合いができるように頑張った。」
 などと挙げていた。しかし中には、「自分の意見を通したかった。」
 「自分の意見が好きだから、意見を変えなくなかった。」

「次は、自分の意見が通るようにしたい。」などとめあてや友だちの意見を捉えることが難しい児童もいた。

本時の「室内ゲーム大会の計画を立てよう」では、「比べ合う」場において、自己評価「それいいね！タイム」を導入した。1回目の意志決定で「宝探しゲーム」16名(59%)に意見が偏った。そして、児童相互の意見交流後「それいいね！タイム」を行うと、さらに5名が宝探しゲームに意見を変更した。児童は、「それいいね！タイム」を通して友だちの意見を聞き理解し、意見が変わった児童もいれば、さらに友だちと自分の意見を比較することで、自分の考えを深め意見をそのままにする児童もいた。そして、自分の意見を整理・修正し、理由を述べることでできた(表1)。

表1 「それいいね！タイム」のノート記述
 C1: Aさんが言っていたように、全員が参加できると思ったから「宝さがし」にします。(修正)
 C2: 全員が参加できて、笑顔でハッピーになるとBさんが言って、納得したから「宝さがし」にします。(修正)
 C3: 私は意見を変えません。なぜなら、「しりとり自己紹介」の方が、みんなできると思います。(整理)

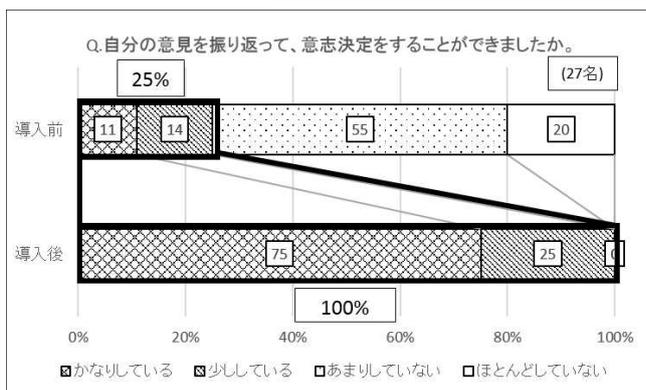


図5 自己評価と意志決定

【考察】

「自分の意見を振り返って、意志決定をすることができたか」のアンケートで、「それいいね！タイム」導入前は25%、導入後では100%の児童が自分の意見を振り返ることができたと回答している(図5)。このことから、話し合い活動の「比べ合う」場で「それいいね！タイム」を設定すると、自分の意見を振り返り意見を整理・修正し、より納得した自分の意見の決定ができたのではないかと考えられる(図6)。話し合い活動後の感想の中には、「それいいね！タイム」で自分の意見を振り返ることが

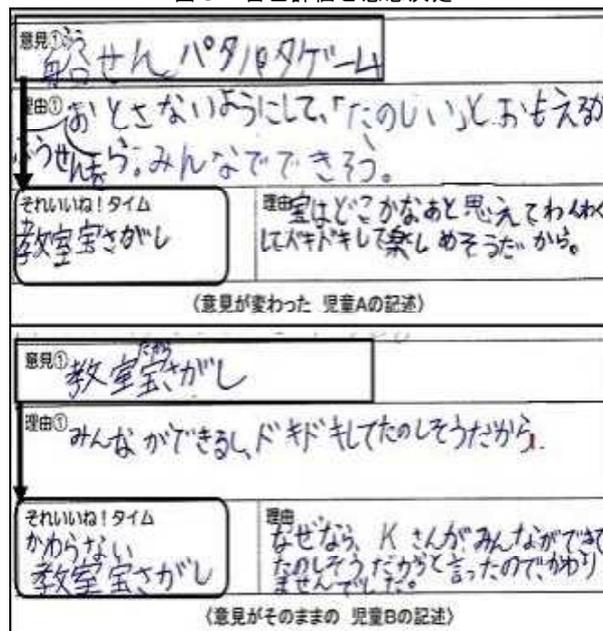


図6 意見を整理・修正した、ノートに記入

ができた児童が多かった(表2)。これらの記述内容から、「それいいね！タイム」を設定すると折り合いを付けて合意形成を図り、よりよい集団決定を行うことができ、自ら進んで実践活動へ取り組むことができるようになってきたことがわかる。

表2 話し合い後の感想

C4: 初めは、自分の意見が一番良いと思いましたが、でも、Cさんの意見を聞いて、みんなで楽しめるのは、宝探しだと思いました。友だちの意見を良く聞いて良かったと思います。早く宝探しをやりたいです。(修正)
 C5: 「それいいね！タイム」で、自分の意見を振意見は、聞きましたが、自分の意見を変えることはしませり返る事ができて良かったです。友だちのんです。次の係活動で「ペットボトルボーリング」を提案します。(整理)
 C6: みんなで決めたので、納得しています。早く係を決めたいです。私は、司会をやりたいです。(整理)

「話し合いで決まったことに、納得していますか」のアンケートでは、導入前で40%、導入後では93%の児童が、集団決定に納得したと答えていた(図7)。アンケートの結果と児童の感想から自己評価を取り入れた話し合い活動で、ほとんどの児童が納得した集団決定を行うことができたという結果が出たことから、自己評価が集団決定に有効であると考えられる。

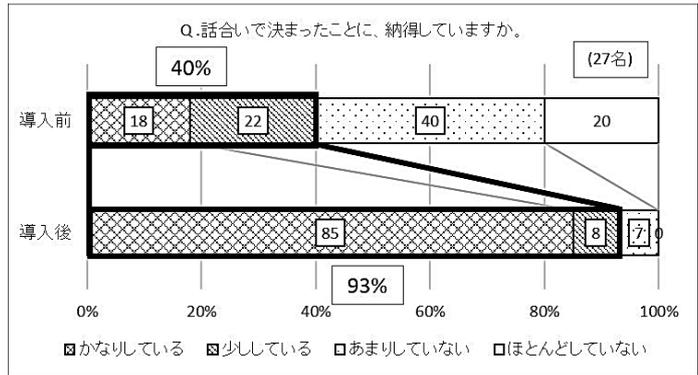


図7 自己評価と集団決定

(2) 実践(集会活動)の場における児童の変容

① 実践(集会活動)準備の様子

児童は、準備している間にも話し合い活動を振り返り、「本当に教室での宝探しゲームは、楽しいのか」と再度話し合う場面も見られた。また、ある係から「ただ宝を見つけることは面白くない。みんなで勝負したいので、点数制にしたい。そうすると盛り上がると思う。」という要望が出た。すぐに全員で集まり、話し合いが行われ、自分たちで「学級生活づくり目標に立ち返ろう。」という声をかけ合っていた(図8)。その結果、「宝を探すことが難しい友だちもいるかもしれない。点数制だとみんなが笑顔でハッピーになれない。だから、点数制はやめた方が良くと思う。」との決定をし、宝を何枚取っても全員に「頑張ったで賞」をあげることを決めた。



図8 学級生活づくりに目標に立ち返り再度話し合う場面

② 実践(集会活動)の様子

実践では、自分たちで立てた計画に基づいて進行していく様子が見られた。児童は、自分の役割を責任を持って行い、全員がゲームのルールを守って、参加していた(図9)。一方で、決定事項を実際に教室で行うと「宝探しを室内で行うことは楽しいけれど、もっと良い方法がないか」「次の宝探しは、運動場でやりたい。広い場所だと、みんながもっと笑顔でハッピーになれるそうさ。」とつぶやく児童がいた。このように話し合い活動から集会活動までを振り返る児童がいた。実践後の児童のアンケートには全員が「楽しく参加することができた」と回答をしている。今までの集会活動と違い、「次回は紙の宝ではなく、箱の中に入っている宝を探したい。もっと工夫がしたい。」という思いを具体的な案で出してくる児童がいた(表4)。



図9 室内ゲーム大会の様子

表4 実践後の感想より

- C7:話し合い活動後に、「宝探しゲーム」は外でやった方が良かったけど、ルールを守りながら、けんかやインチキもせずに教室でみんなが楽しくできたので、「室内ゲーム大会」をやってよかったです。次は運動場でやりたいです。
- C8:本当は、「ダンボールボールゲーム」をしたかったのですが、宝探しをDさんと一緒にやることができたので、とてもうれしかったです。
- C9:僕は、「宝イラスト係」でした。みんなが笑顔でハッピーになるためには、どんな宝の絵を描いたら良いのかSくんと話し合いながら作りました。紙に画いたイラストを切る仕事をみんなが手伝ってくれたので、うれしかったです。

表5 児童の感想より

C9:「それいいね! タイム」は友だちの考えが大切だと思った。なぜなら、みんなが笑顔でハッピーにするためには、みんなが納得しないとイケないと思ったから。これからも「それいいね! タイム」はあった方がよい。
 C10: 話し合い活動だけではなく、ゲーム中もゲーム後も自分たちで「これでいいのか」と話し合いができるようになりました。これからも振り返ることを大切にしていきたいと思います。

【考察】

検証授業と集会活動後の児童の感想は、表5の通りである。児童は、「積極的に集会活動に参加していますか」の問いに、自己評価の導入後は全員が進んで参加することができたと答えていた。その理由として、「困った時や何か決めるときには、学級づくり目標とつなげて、考えられるようになった。」「友だちや自分の意見を振り返って、意見を整理したり、変えたりすることができるようになった。」などの記述があった。

集会活動で行った「宝探しゲーム」の中で、児童は互いにルールを守りながら活動していた。実践準備の段階から、互いにこれまでの活動を振り返りながら、自分たちで課題を解決したり、改善策を提案したりしながら積極的に活動へ取り組む姿勢が見られた。この様子から、児童は集会活動へ自ら進んで参加できるようになったと考える。これは、話し合いの中で、「自分もよく、みんなもよい」という納得した合意形成を図ったことで、よりよい集団決定ができ、実践に対して全員が意欲的になれたからだと考える(図11)。

また、児童は、様々な場面で「自分の考えを振り返る姿勢」や「活動を振り返ること」などができるようになってきた。このことから、事前準備から実践活動の一連の流れの中で、友だちの意見を聞き自分や友だちの意見を振り返りながら、活動意欲を高め、自ら進んで活動に取り組む姿勢を育むことができたと考える。

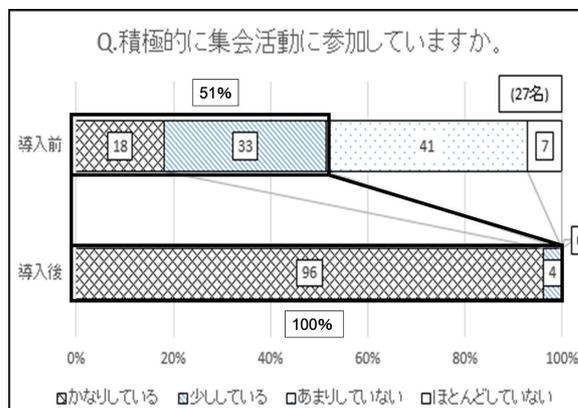


図11 集会活動に対する意欲

VII 成果と課題

1 成果

- (1) 話し合い活動の「比べ合う」場において、自己評価を取り入れ児童の考えを整理・修正することで、折り合いをつけた合意形成を図り、よりよい集団決定につなぐことができた。
- (2) 話し合い活動を通して、児童一人一人が協力し自ら進んで活動に取り組む態度を育むことができた。

2 課題

自己評価がうまくできなかった児童に対して、個別に振り返りの視点や記述の仕方を丁寧な対応を説明していく必要があった。

《主な参考文献・引用文献》

『小学校学習指導要領解説 特別活動編』 文部科学省 東洋館出版社 2008
 『楽しく豊かな学級学校生活をつくる特別活動』(小学校編) 文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター 文溪堂 2014
 『よりよい人間関係を築く特別活動』 杉田洋 図書文化社 2009
 『「自己」を育てる—真の主体性の確立』 梶田叡一 金子書房 1996

